

聖書:ルカの福音書20章9～29節

説教:権威ある方を捨てていく

はじめに

イエスは子ろばの背中に乗って人々の歓喜の叫び声に迎えられながらエルサレムに入られ、すぐに神殿に向かいそこで商売をしていた人たちを追い出します。一見乱暴なように見えますが、神は見える所だけ立派に整えようとする者ではなく、罪に悲しむ者をこそ本当の礼拝者として迎えていることを示すためでした。ところがこれを見て腹を立てたのが祭司長たち。自分たちが管理する神殿で勝手なことをしているイエスを許すわけにはいかない。そうやって息巻いてやって来た祭司長たちにイエスは逆に質問をします。「ヨハネのバプテスマは天から来たのですか、それとも人から出たのですか。」天からと答えれば、ではどうしてお前たちはバプテスマを受けなかったのかと言われるだろう。人からと言えば、人々は怒って自分たちに石を投げるに決まっている。どちらも都合が悪いと思った祭司長たち、結局「どこから来たのか知りません」と答えて急場をしのごうとした。それが前回までのあらすじです。

話しはそこで終わりません。イエスが話したたとえ話を聞いて、祭司長たちがますます腹を立てていくのです。どうしてイエスはわざわざこんなことをするのか。実はここにはまるでミステリー小説かと思われるような巧妙な仕掛けがされていて、すべてが私たちの恵みになるようになっていっています。それがどういうことか見てまいります。

## 1 たとえ話

### 1) 三人のしもべたちと愛する息子

このたとえ話は比較的にわかりやすい。ぶどう園の主人が農夫たちに管理を任せて長い旅に出ます。収穫の時期になったのでしもべを送って収穫した代金を取りに行かせた。ところが、三人ともひどい目に遭わされて、何も持たずに追い返されてしまう。普通ここまでされたら主人は腹を立て、農夫たち懲らしめると思うのですが、ぶどう園の主人は実に寛大です。自分の息子を送ったら大丈夫だろうと考えた。ところが農夫たちはぶどう園を自分たちの者にするために息子を殺し、せっかくの主人の思いを踏みにじってしまいます。かつての日本もそうであったように、聖書の世界でも跡取り息子は家の宝くらいに大切に思われていた。その息子をこんな理不尽な理由で殺されたのではさす

がの主人も黙っていられない。農夫たちを殺してぶどう園はほかの人たちに与えることにした。

このたとえ話の意味ですが、最初に送られた三人のしもべは旧約時代の預言者たちのことです。旧約の預言者たちは時の権力者たちに向かって鋭く罪を指摘したので、王の怒りにふれてある者は井戸に投げ込まれ、ある者は剣で殺され、石を投げられました。そういうことが旧約聖書にたくさん書かれています。では主人のもとから送られてきた跡取り息子とはだれのことか。すでに皆さんもお気づきのことでしょう。神の愛するひとり子であるイエスのこと。そのとおりです。

### 2) そんなことは起こってはなりません

では、このたとえ話を聞いていた人たちはどこまでわかったのか。祭司長たちは、彼らはこのたとえ話が自分たちのことを指していると気づいています。では群衆はどうか。「そんなことが起こってはなりません。」と言っています。それはどういう意味でしょう。農夫たちが身勝手な理由で主人のもとから送られてきた跡取り息子を殺し、ぶどう園がほかの人たちに渡されること。「そんなことが起こってはなりません。」そういう意味で叫んだようです。その跡取り息子が目の前に立つイエスだと分かっていたかまでは、判然としません。

## 2 捨てられた石

### 1) 救いの石

そんな人たちに対しイエスはこう語ります。17, 18節。「イエスは彼らを見つめて言われた。「では、『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった』と書いてあるのは、どういうことなのか。だれでもこの石の上に落ちれば、粉々に砕かれ、またこの石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」」

イエスは詩篇118篇22節を持ちだして問いかけています。少し説明が必要でしょう。たとえ話と関連付けながら考えてみます。ぶどう園の主人のもとから送られてきた跡取り息子はぶどう園の外に放り出されて殺される。それは、「家を建てる者たちが捨てた石」のこと。「それが要の石となった。」殺された跡取り息子が、実は要の石となる。こんな石は役にも立たない、捨ててしまえと言われて放り出された石。まさにその石が、あとになって

からもっとも大切な石になっていく。それはどんな石か。この詩篇はこんなふうになります。23, 24節。「これは主が設けられた日。この日を楽しみ喜ぼう。ああ主よ どうか救ってください。ああ主よ どうか栄えさせてください。」

捨てられた石が実は救いの石になる。その救いの日を主が設けてくださった。イエスはふれませんが、聞いている人たちは、23, 24節のことも思い起こしたはずで。

## 2) 見つめながら

ここで気になるのは、「イエスが彼らを見つめて」語ったとあることです。なにやらイエスは人々の心の奥底に潜んでいる暗闇をご覧になっているかのように。いったいなにが潜んでいたのでしょうか。たとえ話では、主人の跡取り息子が農夫たちの手で殺されていきます。もしその跡取り息子がイエスのことであるのなら、イエスはだれの手で殺されるのでしょうか。今はイエスが跡取り息子であることに気がつかず口々に、「そんなことが起こってはなりません」と言っている人たち、この人たちが「イエスを十字架につけろ」とやがて叫ぶことになる。イエスはそのことをご覧になっています。もちろんそう言うようにと仕向けていったのは祭司長たちですから、「自分たちは祭司長にだまされていた」と言い訳するかもしれません。

日本もかつてそういうことがありました。79年前、戦争に負けると人々は、「自分たちは何も知らされていなかった。だまされていた」と言って、まるで自分が被害者であるかのような言い訳をしました。イエスの場合はどうでしょうか。たとえどんな事情があったとしても、心から「イエスを十字架につけろ」と叫んだのなら、あなたはその罪から免れない。それが「見つめながら」に込められた意味です。イエスは責めているのでしょうか。いいえ、そうではない。ではどのようなことか。

イエスはたとえ話を語りながら、祭司長たちの感情を逆なでするようにして憎しみの心に油を注ぎ、十字架へ向かって走る車のアクセルをどんどん踏み込んでいきます。こうしてイエスの十字架は逃れようがなくなっていく。それはだれのためだったのか。いまイエスが見つめておられる人々のためではないですか。この人たちの罪を背負われてイエスは十字架に向かうのです。

## 3 イエス

### 1) 作り話でなことをだれが証明するのか？

そしてもう一つ、ここで大切なことがある。前回のところで祭司長たちがイエスにこのように質問していました。2節。「何の権威によって、これらのことをしているのか、あなたにその権威を授けたのはだれなのか、教えてくれませんか。」いろいろやりとりしながら結局イエスは8節で「あなたがたに言いません」ということになり答えようとしなかった。でもどうでしょうか。このたとえ話をよく見てください。ぶどう園の主人が送ってきた跡取り息子。それはだれのことか。もちろん人々はイエスのことではないかと薄々気がついてはいます。でもこれは作り話、フィクションですと言われれば終わりではないですか。映画やテレビドラマの最初に「これは架空の物語で実在の団体、人物とは関係ありません」とメッセージが出るのと同じです。でもこのたとえ話はフィクションではない。現実の話しのはず。主人の跡取り息子が、目の前に立っているイエスのことのはず。でも、そのことはどのようにして証明するのでしょうか。それとも、白とも黒ともはっきり点けられないと言うことなのでしょうか。

18節で「だれでもこの石に落ちれば」とか「石が人の上に落ちれば」とあります。いずれも人が粉々に砕かれてしまう。なんとも不気味なことばですが、ようはこういうことではないか。祭司長たちは曖昧な答えで済まそうとしたが、イエスのことに関して言えば、白か黒かはっきりすしていく。

### 2) 祭司長たちの手で証明される

跡取り息子がイエスであることをどうやって証明するのでしょうか。ぶどう園の主人から送られてきた跡取り息子、たとえ話には名前が出て来ませんし、どんな姿格好だったとかということもなく、ほとんど手がかりがありません。「ただ信じなさい」なのでしょう。いいえそうではない。大きな手がかりがちゃんとある。この跡取り息子は、農夫たちの手でぶどう園の外に追い出されて殺される。これが跡取り息子であることのはっきりとしたしるしです。イエスはどうだったか。エルサレムの外にあったゴルゴダの丘で処刑されました。それで私たちの目にはっきりと分かった。まぎれもなくこの方こそ父なる神の権威を帯びて、私たちのところに來られたひとり子の神、救い主。祭司長たちの質問。「何の権威によってこれらのことをしているのか。」その質問にイエスはきちんと答えていたのです。

ところで、そのことをだれが証明することになったか。よく考えてください。イエスを救い主だと絶対に認めようとしなかった人たち、彼らがイエスを十字架につりました。つまり祭司長たちの手で証明されていった。ここは、まるでミステリー小説のようだと言ったのはこのことです。

3) この方が捨てられることが私たちの喜びとなった

ホームレスを支援する働きをされている野中さんから聞いた話です。どうして彼らはホームレスになってしまうのか。世間では、「怠け者だ」とかいろいろ言うけれど、決してそんな単純な話しではないと言うのです。いろいろな複雑な事情があつて家に帰られない。社会に戻られない。そういう人たちが多し。世の中に居場所がないのです。

私たちはどうでしょうか。帰る家があり、寝る布団はあるかもしれない。でも、心の中ではどうでしょうか。人はいつか死んでしまう。このことにつながれていて、そこで悲しんでいます。この世には居場所がないということ。聖書では寄留者だとも言われる。

イエスはどのような姿で私たちのところへ来られたのか。この世界を所有する権利を持つ跡取り息子でありながら、この世から捨てられて追い出されていった。捨てられることを悲しまなくてもよい。捨てられた者にも光がある。この世から捨てられて破れたような姿を十字架にさらしながら語ってくださいました。

この方とともに歩んでまいります。